

新米教師1年目の振り返り ～へき地だからこそできること

伊達市立大滝中学校
教諭 橋上 清香

「完璧だ・・ロボットみたいだ・・。指導することなんて何もないじゃん！」

これが昨年の着任式での生徒の第一印象です。こんなに礼が全員揃っていて、集会中も一言も私語をせず、背筋がピンと伸びていて、極めつけに校歌はもちろん、国家まで元気よく歌うものだから音楽の先生に「もっと厳粛に歌いなさい！」と注意されている生徒を私は今まで見たことがなかった。後に、言われなくても大人がそうあるべきだと思うことを汲み取って動く子たちなのだと知ることになる。だから私は見落としていた。できるから指導することはないと油断していた。彼らがどのような力をつけなければならないかを見取ることができていなかった。今回は、学校内でこの一年、そして現在も気を付けていること、学校外で気を付けていることの二つに焦点を絞って書きたいと思う。

自分が3年間の臨採や非常勤時代にしてきたことは「生徒を自分が引いたレールに乗せて動かすこと」だった。授業でも行事やその他の活動でも「〇〇しなさい。」という言葉や生徒が考えて動く前に指示を出していた。その感覚でここに赴任したものだから、最初は（今も時々・・）何を指導したらよいのか、どう指導したらよいのか全くわからなかった。「静かにしなさい。」や「ちゃんと並びなさい、ちゃんと座って聞きなさい。」という台詞が必要ないので言葉を発する機会が少なかった。授業も同様で、今までは一方的な授業だったと思う。私が英語の文法や知識をすべて説明し、生徒はそれをせさせとノートに取り、その後に音読や言語活動を行っていた。今思うと、臨採時代の授業は顔から火が出るほど恥ずかしい。今よりもさらにつまらない授業だったと思う。しかし、ここに赴任してそのやり方では通用しないことを肌で感じた。ここで求められていることは“言われたことができる人間ではなく、言われなくても自分で考え動ける人間”を育てること、授業においては“受験英語力”ではなく“使える英語力”を付けさせることだと地域の人の飲み会で知った。

これらのことから「私のレールに乗せるのではなく子供たちに考えさせ、自分たちでレールを引かせること、私はその助言役」ということと「授業では説明は最小限に、練習は最大限に」という二つをモットーにやってきた。指示を出したり、説明をすることは簡単だが、いざ生徒たちの力で創り上げようとなるととたんに難しくなった。失敗した時のフォローや軌道修正を考え、一緒に取り組んでいるペアとの仲が険悪になった時にどう声かけをするか、どう気持ちを乗せるか等、説明する時の何倍も様々なシチュエーションを考えなければならなかった。私のシミュレーション不足で失敗することが多かったし、伝えたい想いはあるのにうまく言葉にできずしどろもどろになることが大半だった。しかしその中でも、生徒たちは指示をせずとも自分たちで考えて見栄えは良くないけれど、ペアと協力して課題を達成することができていた。私の説明は最小限に、練習の時間をたくさん取り、一人一人の発音や口元を見て指導することができた。そして、生徒ができた時にはオーバーなくらい、授業中でも廊下でもトイレでも褒めるようにしている。少くく下手くそでも頑張っている時には褒めるようにしている。そこからほんの少しづつだが、話しかけてきてくれたり、弱音をこそっと吐きにきたり、好きな人を教えてくれるようになった。そんな些細なことが本当にうれしいし、これからも続けていこうと思う。

また学校外で必要なことは、「地域に信頼される人間になること」だ。大滝に住んでい

ると自分の知らない間に私の個人情報が一歩歩きする。例えば、昨日は何時に帰ってきたか、いつゴミ出しをしたか、これらは序の口で、コンビニで買ったお菓子の銘柄、家に訪れた人の車のナンバーまで全てを見られているのだ。次の日学校で生徒を出迎えていると、昨日買ったお菓子の銘柄を当てられることは日常茶飯事である。これは空恐ろしいことだと思う。学校内でも外でも教育公務員としての言動に注意しなければならないと思い知った一年だった。逆に、学校にそれだけ興味を抱いてくれていて、行事や PTA 活動では積極的に参加してくれることは本当にありがたいと思う。また、地域や保護者の信頼を得ることができれば、生徒指導もグッとしやすくなった一件もあった。

すでに二年目に入っており毎日猪突猛進の日々だが、生徒一人ひとりのためになっているかを常に考え、教師橋上ではなく人間橋上を前面に出していくこと、地域を大切にすること、この二つを毎日意識しながら過ごしたいと思う。